

59. 腕相撲による上腕骨骨折

田内利幸, 岡崎壮之, 栗原 真
徳重克彦, 森川嗣夫, 飯田 哲
(川鉄千葉)
鍋島和夫 (鍋島整形外科)

われわれは比較的報告例の少ない腕相撲による上腕骨骨幹部骨折を6例経験したので報告する。症例は15歳~44歳, すべて男性である。骨折時の肢位を優勢, 互角, 劣勢の3とおりに分類すると優勢0例, 互角2例, 劣勢3例, 不明1例であった。骨折型は全例遠位1/3で内下方より外上方に向かう螺旋骨折であった。この部位は腕相撲の競技中に働く上腕の内旋筋, 内転筋および肘の屈筋群の付着部の境界にあたり, 3つの力によるストレスの最も大きい部位と考えられた。諸家の報告においても互角から劣勢で折れた例が大多数を占め, 劣勢時では強力な肘の屈筋群の作用が大きいと考えられた。

60. 鎖骨骨折に対する経皮的ピンニング法について

山口喜一郎, 遠藤富士乗, 豊口 透
中馬 敦, 森永達夫 (八街総合)

鎖骨中1/3骨折のtype II b, type III (那須の分類) 21症例に対し K-wire による経皮的ピンニング法を行った。手術は安永が考案した方法に準じて行い, 1症例に遷延治癒を認めたが全例に骨癒合が得られ, 変形治癒はなかった。主たる問題点は loosening によるピン刺入部の皮膚の疼痛であるが, できるだけ鎖骨髄内径に近い太い K-wire で末梢骨片の骨折端より刺入し固定すれば回避できると思われた。

61. 骨接合術を行った大腿骨頭骨折の3例

木下知明, 三枝 修, 斉藤正仁
西川 悟, 李 泰鉉
(成田日赤)

股関節後方脱臼に伴う大腿骨頭骨折3例に対し, 後方進入法にて Herbert screw を用いて骨接合術を行った。術後経過18カ月 (Pipkin IV型) の症例は正常に進歩しており, 術後経過90日, 14カ月 (各々 Pipkin II, IV型) の症例も歩行時軽度の疼痛を有するのみである。単純X線・CT 上, 3例共に骨片の接合状態, 関節の適合性は良好であり, 術後経過は短いが変形性関節症変化も認めない。また骨シンチグラム・MRI 上, 明らかな骨頭壊死像も認めず, 現在までの所経過は良好であり, 同 screw を骨接合に使用することは有用であると考え

た。

62. 脱臼を伴わない大腿骨頭骨折の2例

安宅洋美, 土屋恵一, 上野正純
山口 潔 (県立佐原)

脱臼を伴わない大腿骨頭骨折の2例を経験した。症例1は71歳, 女性。入浴中転倒し右股関節痛出現。X線上脱臼を伴わない右大腿骨頭上外側部の陥没骨折と診断し, 人工骨頭置換術施行した。症例2は16歳, 男性。バイク事故で受傷。画像上左大腿骨頭上外側部の剝離骨折と剝離骨片の介在が認められた。骨頭上外側部の1.5×1cm 厚さ3mm の軟骨片と, 2×2.5cm 厚さ5mm の剝離骨片を整復し, ハーバートスクリューで固定した。また軟骨陥凹部を持ち上げて大転子より骨移植も行った。術後5カ月の現在疼痛なく経過良好である。

63. 老人の大腿骨頭部骨折の治療予後

南 徳彦, 大木健資, 林 謙二
高田啓一 (国立国府台)

65歳以上の大腿骨頭部外側骨折で, DHS 固定法施行後1年以上経過例につき, アンケートによる調査を行った。アンケート内容は, 日本リハビリテーション医学会のADL 評価表, Lawton & Brody の手段的ADL 尺度, 日本整形外科学会の変形性股関節症の判定基準を基に作成した。結果は, 44例に調査可能であったが, ①術後1~5年3カ月の経過で, 34.1%が合併症にて死亡していた。②寝たきり状態の原因として重要な合併症は, 痴呆および中枢神経系障害と心臓血管系障害であった。③受傷時と調査時ADL との変化は僅かであった。④患者のQOL 向上のためには, 介護者である家族が, 患者の生活行動を制限しすぎないように指導する必要がある。

64. 外傷性股関節脱臼の治療方針

太田秀幸, 高橋淳一, 小林絃一
中村哲雄, 雄賀多聡, 北崎 等
成重 崇 (千葉労災)

対象症例は当科で治療した48例48関節で, 年齢は4歳~60歳, 平均35.0歳, 脱臼形式は前方脱臼2例, 後方脱臼31例, 中心性脱臼15例であった。追跡調査可能であった43関節について臨床的に検討した。脱臼形式は前方脱臼2例, 後方脱臼30例 (Thompson & Epstein Type 16例, Type II 2例, Type III 10例, Type IV 1例, Type V 11例), 中心性脱臼11例 (Rowe Type I 2例, Type II 2例, Type III 2例, Type IV 5例) であった。